

資 料 3

第4回審議会における主な意見等

1. 審議会の答申を22年度末とするスケジュールであったが、十分な審議を尽くすことを最優先とし、当初の答申時期に拘束されないことを確認した。
2. 小・中学校の学区域と地域との関係を検証できる資料を整え、この審議会では調整を図っていくこととしたい。
3. 小学校の望ましい規模とは、子どもたちが社会性を身につけるための集団としての規模、学級編制替えができて、若手、中堅、ベテランの教員をバランスよく配置し育成できる規模、担任教員が子どもと向き合え、望ましい環境を整えられる規模等から、1学級あたり20人から30人、12学級から18学級とすることを審議会の共通認識とし、今後の審議にあたる。
4. 望ましい規模が共通認識されると、板橋区に必要な学校数もある程度予測可能となることから、適正配置についてもシミュレーションを行い、理想の形を示す必要がある。そこから、具体的な問題が浮かび上がるのではないかな。
5. 国の学級編制が40人学級となっている現時点で、望ましい1学級あたりの人数を20人から30人とするものの整合性をどのように考えたらよいのか。小規模校の教育上のマイナス面が問題となっているのだから、そのところを審議会でも明らかにし、京都市で行なったように地域住民全員に学校のことを考える機会を持ってもらえるような方向に進むべきではないかな。
6. 京都市のように最終決定は地域に委ねる方式を考えていきたいが、地域に委ねることになる数は、審議会でも議論し決めておくべき。
7. 中学校は、教科担任制できめ細かく見るためには少人数の方がよいが、集団の中で、自己の位置づけや行動規範等を学ぶことを考えると、望ましい規模は、1学級あたり30人から35人と考える。
学校規模としては、主要5教科に複数教員を配置できる10学級程度が1つの目安となるが、学校運営や部活動等を考慮すると、望ましい規模としては12学級から15学級で審議会の共通認識とする。

8. 今後、地域との連携の必要がますます高まることから、地域センターごとに学校の必要数を出してから、改めてそこに地域性についての考慮を加え、1つ1つ課題をみていっては如何か。
9. 新1年生が13人の入学式に出席したが、6年間このままでコミュニケーション能力が十分に身につき、中学生になって大きな集団に入っていけるか心配になった。小規模校の良いところもあるが、子どもの成長過程に及ぼす問題点もきちんと述べて、その対応も審議会で議論しないといけない。
10. 次回は、小規模の学校の問題点を整理しながら規模の議論を整理し、同時に地域とのつながりがどのようになっているかの資料を作成し、配置についても検討したい。